

暗い人

第二部

井上光晴

T S U H A R U I N O U E

.....Part 2.

MITSUHARU INOUE

暗い人

第一部

井上光晴

河川書房新社

暗い人 第二部

一九八九年八月二〇日 初版印刷
一九八九年八月三十一日 初版発行

著者 井上光晴

装幀 戸田ツトム

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 四〇四―一二〇―(営業)

四〇四―八六一―(編集)

振替口座(東京) 〇―一〇八〇二

印刷 大日本印刷株式会社

製本 小高製本工業株式会社

©1989 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-309-00581-0

目次

第五篇	零時の樹氷館	5
第六篇	風狂記	55
第七篇	蟻の空	111
第八篇	南風座が行く	157

暗い人 第二部

第五篇

零時の樹氷館

I 道脇清津の場合

小止みなく降りつづく雨音を、自室の硝子窓ごしにききながら、道脇清津は耳奥に残る七橋れい子の声から逃れられなかった。休日の夜、八時五十五分。門限すれすれに樹氷館に帰ってきた彼女を待伏せするようにしてあらわれた当直番の女が、「すぐ先生の部屋に行きなさい」と告げたのである。

道脇清津を坐らせて、七橋れい子はしばらくものをいわなかった。人前では決して素顔を見せたことのない、五十一歳の女であったが、普段とは際立つ薄い化粧で、口紅も殆どつけていない。「あなた、なぜ此処に呼ばれたか、知っていますね」

彼女は咄嗟に返答ができなかった。

「返事できませんか、どうして黙ってるの」七橋れい子は眉間を中指の先でなぞった。「あなた、今日の休み、どんなふうに過ごしました。……それもいえませんか」

「はい、南有馬の方に行っておりました」

「何のご用で」

「はい、〈四郎蘇生〉の講に。……」

「ほう、〈四郎蘇生〉の講に。それは何時から」

「修行の参考に、いくらかでも役に立つかと考えたのです」

「何時から通うようになったかときいているのよ。〈四郎蘇生〉の講に入っただのは何年の何月。……」

「入ってはおりません。話をききに、初めて行っただのは、去年の十一月でした」

「去年の十一月から、ずっと休みのたびに〈四郎蘇生〉に通っていたというわけね」

「ずっとではありません。……天草四郎がどうしてこの世に蘇ったのか、その道理を知りたいと思うたのです。それは、樹氷館の修行にきつと役立つと考えました。それで……」

「〈四郎蘇生〉の中心者は確か蔵之元四郎といいましたね。どういう人ですか」

「はい、それは……」

「どうしたの。いいにくいことでもありますか」

「いいえ、蔵之元讓というのが本名で、以前は五島の方で真珠を養殖する仕事をしておいでだったとききました。……奥様と娘さんが二人。お話は少しわかりにくかと思いますが、みなさんはとも信じておられる様子です」

「何を信じているの」

「え。……」

「いまそういったでしょう。みんながとても信じているって。だからきいてるの、蔵之元四郎の何を信じているかって」

「そっくりそのままのお話かどうか、あたしは全部を信じていません」

「全部を信じていないが、半ばは信じるということね」

「……………」

「半ばを信じているのなら、もう上等。蔵之元四郎から何を得ましたか、あなた」

「よくわかりません」

「どうして、何がわからないの」

「〈四郎蘇生〉の話をききに行ったのは、みんな修行のために、ほかには何もなかとです」

「蔵之元四郎から何を得たのか、それを確かめているのよ」

「何を得たのかといわれるなら……自分が天草四郎になりきっておられて、どんな質問にも、天草四郎の言葉ではっきりした返答をされることなんか……そこに隙間がないので、みなさんもいよいよ信じるようになられるし、初めてきた人も、矢張りそうか、この人は天草四郎の生れ変わりだと思ふようになります。……」

「たとえば」

「はい。……」

「どんな質問にも隙間のない言葉を返すと、そういいましたね。隙間のない言葉って、どんなふ

うに」

「天草の乱で、糧食がつき果てた時、あなたは何を食べていたのかときく者があつて、四郎さまは即座に答えられました。柿の葉を煮たものと、それに干したよもぎ。みんなとおなじものを食べたのだと……」

「四郎さまと呼んでいるのね、そこでは」

「はい。……」

「病人に奇蹟を起すのでしょうか。そうきましたよ」

「奇蹟かどうかわかりませんが、大抵の患いは消えると、みなさんはいうとられました」

「あなた、直接みたことがあるの」

「はい、あたしが知っているのは、ひとりだけです。肥前鹿島の方からきたという三十歳位の人でした。蜜柑の選別をする工場で働いたうちに、頭のどうかなって仕事も手につかなくなつて、病院に通うてもはかばかしいかんし、それでみえられたとですが……あの方が三十分も話されて、それから額に手をあてると、いっぺん気絶したようになって、しばらくして目を開けると、気持のすうつとしてきたといわれました。……」

「四郎さまといつてもいいのよ、遠慮せずに。……それからどうしたの。病人はすっかりよくなつたんですか」

「すっかりよくなつたかどうかはわかりません。その時、あたしの見た限りでいえば、鹿島からきた人は別人のようになられました。一緒についてきた人もよかつたよかつたとよろこばれてお

ったようです。その場にいた人たちも拍手をしたり、あの方を拝んだりしていましたが、しばらくしてあたしは帰ったので、それからあとの様子は知りません」

「病人の額に手をあてて、蘇った。あなたはそれを目のあたりに見た。そうですね」

「はい」

「蔵之元四郎は奇蹟を行う。あなたはそれを信じたのね」

「まるつきり、信じたわけではありません」

「なぜなの」

「鹿島からきた人がほんとによくなったのかどうか、はつきりきいていないからです」

「でもあなたは、それから何度も〈四郎蘇生〉の講に行ったんでしよう。鹿島の病人がどうなったか、みんなの話にもでてるわけだし、いくらでも確かめられるわ。そうじゃありませんか」

「ほかの人の話はたくさんでしたが、鹿島からきた人のことはそれつきりきかんやっただけです」

「ほかの人の話というと、矢張り蔵之元四郎の奇蹟ですか」

「それもありますけれども、硝子のクルスが割れて、おかげで命拾いをしたとか、乳癌にならずにすんだというような話です」

「硝子のクルスを売ってるそうですね、〈四郎蘇生〉では」

「売ってるではありません。四郎さまから授かるのです」

「おかしいわね。値段が高いので、ローンで買う人もあるとあたしはききましたよ。まあ、それ

はどちらでもよろしいけれども、もし売るのでなければ、蔵之元四郎は硝子のクルスを誰にどんな条件で授けるの。誰にでも希望者全員に与えるのではないでしょう」

「〈四郎蘇生〉の伝道に力をつくした者に授けられるのだと思います」

「思いますというのもおもしろいわね。あなたは授かったのですか」

「いいえ」

「どうして」

「あたしには力がありません。それに何としても樹氷館の人間ですから」

「あなたが、樹氷館にいるのを、〈四郎蘇生〉の人たちは知っているのですか」

「はい、いいえ。何も話してないので、知らないと思います」

「また思いますなのね。蔵之元四郎は奇蹟を行うのなら、その人に見破れないはずはないでしょう」

「四郎さまは何もいわれません。これまで樹氷館の話をされたこともなかとです」

「〈四郎蘇生〉では、何処で何をしていることになつてゐるの、あなたの境遇。……」

「雲仙のホテルで働いているといっています。何もきかれませんが、きかれた時には、そんなふうに答えていました」

「思いもよらなかったわね。……」

七橋れい子は独り言のように呟くと、玉子に似た目鼻立ちの顔をぐいと動かして、彼女に鋭い視線をあげせた。

「〈四郎蘇生〉と樹氷館と、あなたはどちらが大事。……」

「それは、もう。……」道脇清津は唇をなめた。「樹氷館はあたしの家、〈四郎蘇生〉とは較べものになりません」

「そう。それなら今すぐ〈四郎蘇生〉との関係を絶ちなさい。それができなければ、此処を出ていくことになりますね。……どちらでもよろしいのよ」

「先生、それは。……」

「何なの」

「あんまりない方です。樹氷館の家があつて、あつたればこそあたしは〈四郎蘇生〉に行きました。七橋先生の教えを深めるというか、とことん受け止めたいと考えて、外の空氣に心の底をさらしたとです。ほかに意味はありません。〈四郎蘇生〉に行つたのが過ちなら、いくらでもお詫びします。どうかお許し下さい。……」

ドアを叩く音がして、答える間もなく隣室の日原縫子がぬつと顔をだした。去年の暮まで同じ部屋で起居をともにしていた元デパートの店員だ。彼女より十歳も年上だが、妙にうまの合う軽い女であつた。

「やられたとばいね、ばっちり」

「何が」

「知つとるんよ、みんな。油をばっちり先生に絞りあげられたとでしようが。みなさんご存じですよ。〈四郎蘇生〉の一件は。……それで、落着きなりましたか」

「明日、樹氷館を出て行くようになりました。挨拶もできませんがみなさんよろしく」

日原縫子は上半身にまとう部屋着代りの男のワイシャツを、ぐつと押しだすような恰好で部屋に入ってきた。

「まさかのまさかじゃなかとね。……嘘と本気ははっきりはじめをつけとかにやいけん」とよ

「はじめもへちまありません。明日出て行きます。みなさんさようなら」

「またまた。質のわるか冗談は好かんとよ」

彼女はうるんだ目を作つて相手を見上げ、それから畳に俯せになつて泣き真似をした。

「冗談でしょうが。……清津。嘘でしょう、そんなくらいのことでまいるはずもなかもんね、あんたが。……ねえ、あんまり冗談のきつかと、怒るよ」

その辺で舌をだしてもよかつたが、彼女はなぜか真剣に肩をゆすつた。鼻の中がむず痒くなつて片方の目にじんわりと熱いものが滲む。

「怒るよ、ほんとに。ねえ、清津、わる乗りしちやいけん」とよ。……先生に何といわれたかしれんばつてん、それだけの話たいね。清津にいちばん目をかけとんなつたとは先生よ。……いい加減に止めなさい。ほら、顔をあげて。……あんた、ほんなこと泣いとるんね」

道脇清津はいやいやをする身振りで、肩にかかる相手の手を払い除けた。

「あきれた。本気ね、あんた。……何をいわれたかしれんが、清津らしゅうもなかとよ。ほら、機嫌を直して、わけを話してみらんね」

途端に顔を被う両手を開くと、彼女は「ばあ」といった。

「涙のでとりたい」日原縫子はいった。「がーんと一発、くろうたとしやなかとね」

「そいけんいうとるでしょうが。いろいろお世話になりましたって。明日の朝、いちばんに出て行く」とよ

「四郎蘇生」のことはうちも知らんやつたとよ。人のわるかとやけん、清津は。……うちだけでもこつそり教えてくれたらよかつたのに」

「教えとつたら、一緒についてきましたか。あんたがそがん恐ろしかことをして、七橋先生にでも見つかつたらどうするとねといいながら、泣きの涙でお止めなされたわいなあ。……」

「冗談いうとる場合じゃないでしょうが。先生に何といわれたと」

「蔵之元四郎の奇蹟は真実なりや否や」

「それで、清津は。……」

「真実にして真実にあらず。いわく、不可解」

「ほんとに、そういうたとね」

道脇清津は両腕を大きくのばした。

「腹の減つたなあ。どう、風呂に入つて、八太郎の煮込みを食べに行かんね」

「風呂に入りよつたら間にあわんよ、時間の」

「大丈夫。リンリン、煮込みうどん二人前、湯帰りの美人に準備しとくように。わかりましたか、

八太郎の若禿げちゃん」

「かないませんね、清津には」